

母神山古墳群千尋支群第1.4.5.6号墳
発掘調査概要

【観音寺市文化財調査報告第3号】

1973

観音寺市教育委員会

は　し　が　き

観音寺市は三豊平野の中心として古くから文化の栄えたところで、市内には大小無数の古墳があるが、急激な地域開発のなかで、これら文化財がこわされてしまうのが現状であります。

本市の中心部にある母神山は、独立した丘陵地帯で、山頂から各尾根や麓にかけて古墳が群集しているが、戦中戦後の農地開発等で大部分は破壊され多くの出土品も分散しておりますが、これらを調査し資料を蒐集して次の世代に伝えることは、我々の責務であると思います。

母神山古墳群の発掘調査については、昭和42年に市文化財保護委員会から出した「母神山黒島林1号古墳群調査報告書」による黒島林1号～4号と昭和47年2月三豊総合運動公園敷地造成工事中に発見され調査中の13号～16号があります。

今回の調査は、母神山千尋古墳群の一部で、香川用水事業にかかる受水施設の建設現場において工事中発見されたもので、残念ながら記録保存という方法しか講じ得なかったが、この調査報告書が広く一般に活用され、今後の文化財保護に役立てば幸いと思っております。

最後になりましたが、この調査にあたり調査を担当された方々ならびにご協力をいただいた各方面の方々に心から感謝の意を表する次第であります。

昭和48年8月

社会教育課長 豊田義文

発掘調査関係者名簿

1. 所 在 地 観音寺市木之郷町字片山499番地
同 上 500番地

2. 調査期間 昭和47年12月25日から昭和48年3月24日まで

3. 調査主体 香川県文化財保護協会

4. 調査の組織

<調査委員> 観音寺市文化財保護委員 船場久勝
タ 大西久吉

タ 石川巖

タ 三野貫一

<調査指導員> 香川県教育委員会社会教育課 松本豊胤
タ 松本敏三

<調査員> 岩田隆

奈良大中学 中野雅美

<調査補助員> 観音寺市教育委員会社会教育課 我部山正雄

タ 二宮嘉幸

タ 香川清

電谷大中学 国土清治

大阪経済大学 矢野道夫

タ 石井利幸

九州産業大学 岡田正巳

日本大中学 岸上時雄

高瀬高等学校生

観音寺一高地歴部員 藤井四郎他10名

目 次

はしがき

調査関係者名簿

1. 母神山古墳群千尋	1
2. 調査の概要	1
(1) 1号墳～墳丘・石室	1
～遺物出土状態	
(2) 4号墳～墳丘・石室	2
～遺物出土状態	
(3) 5号墳～墳丘・石室	5
～遺物出土状態	
(4) 6号墳～墳丘・石室	6
～遺物出土状態	
3. 結び	8

卷頭図版 千尋支群全景航空写真

図版 1 (1) 千尋支群第1号墳全景 東より	
(2) 同上 東南より	

掩 図 目 次

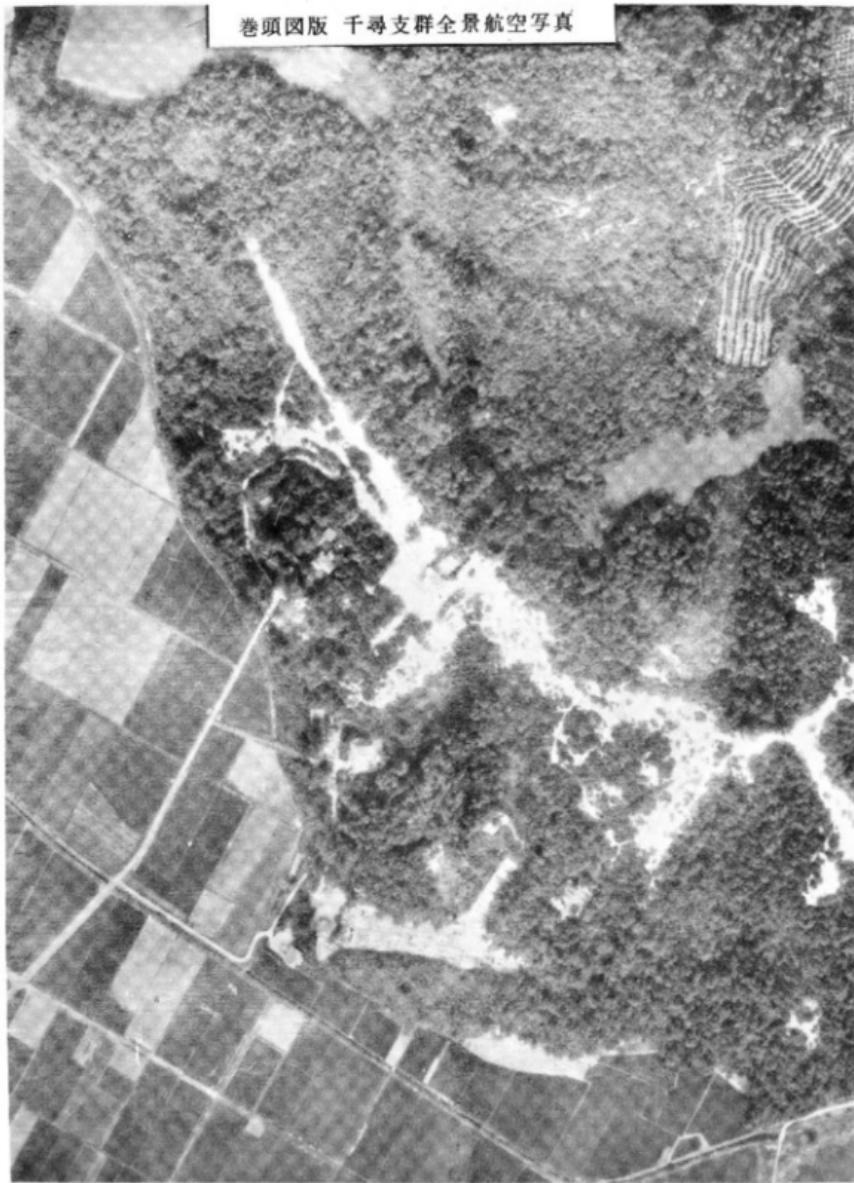
第 1 図	母神山古墳群千尋支群位置圖、縮尺 2,500 分 / 1
第 2 図	千尋支群第1号墳附近測量圖、縮尺 100 分 / 1
第 3 図	同上 地層断面、石室壁横断面圖(折り込み)
第 4 図	同上 床面実測図、側壁実測図(一覧)
第 5 図	同上 遺物出土状況図
第 6 図	同上 出土品実測図
第 7 図	千尋第4.5.6号墳附近測量圖
第 8 図	第4号墳断面図
第 9 図	～ 遺物出土状況図
第 10 図	～ 床面実測図
第 11 図	～ 石室横断面図
第 12 図	第4号墳遺物実測図(須恵・土師)
第 13 図	～ 同上 (鉄鏡・玉類・装身具)

第 14 図	第 5 号墳断面図・遺物出土状況図
第 15 図	〃 床面実測図
第 16 図	〃 遺物実測図
第 17 図	第 6 号墳遺物出土状況図
第 18 図	〃 第 1 床面実測図
第 19 図	〃 第 2 床面実測図・石室縦断・羨道横断図(折り込み)
第 20 図	〃 挖方実測図・石室横断図
第 21 図	〃 遺物実測図(壺の身と蓋)
第 22 図	〃 同上(須恵器・鉄鎌)

図 版 目 次

- 図版 2 (1) 1号墳刀子・鉄鎌
 (2) 〃 平瓶
 (3) 〃 ガラス玉・管玉・切子玉
 (4) 4号墳勾玉・切子玉・管玉・ガラス玉
- 図版 3 (1) 4号墳鎌・鉄鎌・やじり
 (2) 〃 土師高坏(大)
 (3) 〃 須恵高坏(小)
 (4) 〃 〃 (小)
- 図版 4 (1) 5号墳須恵・器台
 (2) 〃 ガラス玉・管玉
 (3) 〃 直刀・刀子・鉄鎌
 (4) 〃 鉄鎌・鉄鎌
 (5) 1号墳土玉
- 図版 5 (1) 6号墳台付直口壺・台なし直口壺
 (2) 〃 提瓶・壺身
 (3) 〃 鉄鎌
 (4) 〃 刀子・鉄鎌
- 図版 6 6号墳壺身と壺蓋
- 図版 7 (1) 4号墳全景覆土除去状態
 (2) 〃 直堀落石除去状態
- 図版 8 (1) 4号墳遺物出土全景北西より
 (2) 〃 ガラス玉・管玉出土状況
- 図版 9 (1) 5号墳遺物出土全景 北東より
 (2) 6号墳全景覆土除去状態
- 図版 10 (1) 6号墳石室排水溝蓋石出土 北西
 (2) 〃 石室・羨道排水溝全景
- 図版 11 (1) 6号墳側壁積石・排水溝堀方

卷頭図版 千尋支群全景航空写真



図版 1 (1) 千尋支群第1号墳全景 東より



(2) 同 上 東南より



1 母神山古墳群千尋支群の概要

財田川・柞田川が形成する三豊の沖積平野とそれに舌状に突き出た多数の洪積台地の突端やその谷合には、いくつもの弥生時代から古墳時代にわたっての遺跡が見い出される。前者では、流文水銅鐸が出土した吉川遺跡・財田川の自然堤防上に立地していた櫛之口遺跡（弥生）住居址と墓地（壺棺）が近接して見つかった石田遺跡（古墳）・村黒遺跡（古墳）等があげられる。また平野を見おろす小高い丘陵や山の中腹には弥生時代中期の壺棺群鹿岡遺跡、同じく粟井常次遺跡、弥生時代から古墳時代にかけての箱石棺群前の原遺跡が存在する。古墳は中期と推定される丸山古墳と青塚がある。丸山古墳は直徑約30mの円墳で葺石・埴輪を有し二基の堅穴式石室内に舟形石棺がおさめられていた。青塚は周溝葺石を有する全長約45mの前方後円墳で、丸山古墳と同様の舟形石棺の一部が出土したと伝えられている。前期古墳は、鹿岡の小円墳が、船載の內行花文鏡が出土したことからそれと推定されるだけで他ではない。後期古墳は三豊平野をとりまく丘陵にあまねく存在する。興昌寺山古墳群・鹿岡古墳群・野津午古墳群・森安延命院古墳・大野三野山古墳群・財田西吉田古墳群・粟井藤目古墳群・中延古墳群・赤岡山古墳群・大野原古墳群が代表的な古墳群である。特に農中町野津午古墳群は、母神山古墳群とほぼ同数の約40基近くが群集しており、大野原古墳群の楕圓墳・平塚・角塚は石室の全長が10m近い規模を有する巨石墳である。

歴史時代に入っては、沖積平野には条理的の跡が現在も残っており、高屋庵寺・道音寺跡・妙音寺跡・大興寺跡・安井院寺など白鳳時代から奈良時代にかけて建立された寺院址が発見されている。

母神山古墳群は、これらの遺跡がすべて見わたせる位置にあり、多様な歴史的発展の真ただなかに形成されているのである。

2 調査の概要

【1号墳】

<墳丘>

千尋社から北に伸びる尾根からわずかに西に突出した小尾根上に位置する。標高は約45mで、すぐ下の平地からの比高は20m程である。発掘調査前、すでに防空壕の陥没や道路敷設工事によって、墳丘の東側半分以上が崩れさせており、残りの西半分も自然の流出が著しく、原形をとどめているとは言えない。しかし、墳丘切りとり部分から直徑約8mの円墳であったと推定される。

1号墳とは道路をはさんで少し高所に2号墳がある。2号墳は道路によって、ほとんど切り崩されており、道路から墳丘盛土までは約1.4mある。1号墳の現在の墳頂と2号墳の盛土基底部の高さとはほぼ同じである。このような点から、1号墳の墳丘築造は、2号墳あたりから西に伸びてくる小尾根をカットし、さらに石室部分を切り込んで築かれたものであろう。ただ地山面は断面図で見られるようにかなりの凹凸があり、十分な整地は行なわれなかったようである。盛土は現存している最高部で約1mの高さを測り、断面からは地山を削った土と推定される黄褐色土と、炭はじりの赤褐色土の互層からなっているのが観察できる。

<石室>

先述のように、底道部と玄室東側壁は防空壕陥没によって失われていた。天井石も見あたらなかったが、これは最初からなかったのではないかだろうかと考えられる。石室の規模は以上のようない状態であるので、玄室の規模のみ推定できる。長さは約2.6m、巾は約2mを測る。現存している玄室の高さは約40cmであるが、築造当初も現状とあまり変わらなかったのではないだろうか。石室側壁には約40×20×20cmの柱状の石を使用し、それを小口積みにして3～4段程度積み上げてある。ただ最上段にはやや偏

平な石を所々に使用している。これらの石はすべて砂岩の河原石である。この石室側壁の積み方の特長は、奥壁と側壁とのコーナーが角をつくりながらやや丸みを帯びていることである。この傾向は東側壁に顕著に見られ、西側壁の側壁上面は石を放射状に積み、丸いコーナーをなしているが、床面では角を造っている。これは東側壁が陥没してしまっているため、わずかに残ったコーナーが少しずれたためであろう。

玄室側壁に使用されている石が、大人1人で2~3個は運べる大きさに対して、袖石は極端に大きく、 $40 \times 40 \times 100$ cm程の大きさで、立ててあった。

~ 床面には小児のこぶし大の砂利が敷きつめられていた。床面は平坦ではなく、凹凸が著しい。大きい遺物はすべてこの床面上にあり、小さい玉類は敷石の間に落ち込んでいるものもあった。

これら砂利敷の下に、さらに $20 \times 20 \times 5$ cm程の板状の河原石が敷かれていた。しかし、現状で保存されることが決っていたため、砂利を少し取りのぞいて1 m確認しただけである。

< 遺物出土状態 >

出 土 状 態

出土遺物は、すべて砂利敷の床面上からである。そして、それらは石室西半分の奥壁側の玉類を主体とした一群と、袖石付近の鉄器を主体とした一群に限られる。やや例外的に平瓶が一個体袖石よりの主軸近くから出土した。須恵器はこの平瓶の他に小型化した提瓶が2個、奥壁近くで出土した。

玉類の出土状態は水晶切子玉が奥壁の石の間から出土する。ややまとまりを欠いており、また鉄器類の破損が多く、後世に攪乱を受けたことが推定される。

須恵器 平瓶1 提瓶2

金銅環 2

鉄製品 直刀(破片)1 刀子5 鉄鎌12
鎌1

玉類 切子玉1 管玉2 ガラス玉5
小玉19 玉2 土玉122

提瓶(1.2) 小形ではあるが、形・造り・焼成ともに良好な提瓶である。体部両側の耳は、製作当初からない。全体に丸味をおびる。

平瓶(3) 口縁部は少し外に開く漏斗状である。体部上部はやや偏平で、底部も少し平面を有するかのようであるが、總じて丸味をもち、底線をみない。

刀子(4) 全長 8.3 cm、刃部の長さ 8.2 cm の刀子である。全体に遺存状態がよく、茎全体に木質部が残存しており、茎先には植物質の糸をまきつけた状態が観察できる。

(5) 刃部が欠損しているので大きさは不明だが、刀子(4)より大きい。

鉄鎌(6) 全体に偏平で平根形式である。茎部は二段になっており、断面は矩形である。

(7) パチ形の平根式鉄鎌である。

玉類 12面カットの水晶製の切子玉である。硬玉製の管玉 一方から穴を開けている。

ガラス製の玉類。大きさ・形・色は不整いである。小玉もある。

土製の玉製・ガラス玉をおぎなうものであろう。

【 4 号・5 号・6 号 墓 】

4.5.6号の各墓は、名所塚を最高所にして、北西に長くのびる尾根上に、高所から6号・5号・4号墳とならんでいる。6号墳は標高約58m、5号墳は約56m、4号墳は約53mである。これら三基の古墳は盛土の流失が著しいうえに6号墳4号墳の上にはそれぞれ祠が建られていた。

【 4 号 墓 】

< 墓丘 >

4号墳は前述のように墳丘の約半分を削平して石鏡山の祠が建てられていたうえに、調査にかかる以前に石室より北西半分と前庭部が工事によって削り取られてしまった。従って墳丘の

規模は正確にはわからないが、石室の中心から地山を切り込んだ南東の墳丘の裾までは約8mあり、直徑は約16mと推定される。高さは、前述のような状態があるので不明である。墳丘の築造については、尾根の高い側を切り込んで墳丘を削し、約60cmほど墳丘を削りあげた所からほぼ水平に削平している。この削平面はほぼ平らで、かなりていねいに工事されている。さらにこの水平面を約60cm、すなわち墳丘築造のため尾根を切り込んだレベルと同じ高さまで切り込んで石室構築している。石室の北西側も石室基底部より約20cm程高く地山を削り水平にしている。盛土の残存は一部であるが、粘土質の黄褐色土を地山全体に盛り、南東側半分ではあるが有機質を含んだ黒褐色土が盛られていた。

<石室>

墳丘も大きく破壊されていたが、石室も大規模な盗掘を受けており、ほとんど原形をとどめている。漢道部東南側が高さ40cm、石積みにして三段ほどが残存していただけで、他は根石のみで、その根石もかなり抜かれていた。

石室は片袖式の横穴式石室で、N 40°E の方向に開口している。片袖式と判断したのは北西側の根石およびその掘り方が直線となるからである。漢道部は根石が抜かれ、掘り方もくずされている部分が多くあったが、漢門の石が動かされていなかったので、以上のように判断できた。石室の大きさは、全長6.35m、玄室長3.75m、玄室幅は奥壁部で1.6m、中央部で1.55m、袖石部で1.2m、漢道長2.6m、巾0.75mである。(高さは先述のような状態であるのでまったく不明である。)

石室の構築方法について、わずかに残存している側壁は根石等から観察すると、すでに墳丘築造のところで述べたように、地山を石室よりやや大きめに掘り込み、その後、石室築造計画にあわせて根石を固定するための深さ約10cm、巾は奥壁部で40cm、側壁部で25cmの溝を掘る。この溝に40×20×20cmほどの棒状の石を根石として石室に平行に埋め込んでいる。奥壁部

の溝が側壁部の溝に比べて深くて巾が広いのは根石がやや大きかったせいであろうか。この根石の上に根石とほぼ同大の石を根石内側にそろえて小石積みにし、その上にやや偏平な石を積みかねていく、ほぼこのような構築方法である。

石室に使用されている石は、玄室南西に使用されている石をのぞいてすべて丸みをもった砂岩の河原石である。これらの石は1人で1~2個ほどもてるほどの大きさで近くを流れる柞田川から運んだものである。

玄室内にはこぶし大の砂岩が10cm程の厚さに敷きつめられていたが、漢道部はそのような構造にはなっていない。敷石には大きさのばらつきがみられ、玄室中央部に敷かれている石がやや小さく、小児のこぶし大であるが、玄室から漢道部にかけて排水溝らしき溝がみられたが、長さ1.3m、巾20cm、深さ5cm程で、漢道部を貫ぬいていず、漢道部に入った付近で終る。この溝に漢道部近くで2個の石をもって蓋をしてあった。

<遺物出土状態>

出土状態

玄室奥壁から1/3を占める敷石面のほぼ中央部から數片の骨が出土した。これらの骨は腐蝕して原形をとどめず、部位不明である。

遺物は奥壁にそった所の玉類を主体とした一群(第1玉群)と東側壁によつた所の玉類を主体とした一群(第2玉群)、袖石近くの須恵器・土師器を中心とした一群にわけられる。他の遺物は石室全体に後世に盗掘を受けた時に攪乱されたものであろう。これらの遺物は小玉頬など砂利の敷石の間に落ち込んだものをのぞいて、すべて敷石上面から出土した。ただし漢道部からは何も出土しなかった。

遺物

須恵器	高环3(№1~3)	環1(№4)
土師器	高环1(№5)	耳环2(№6・№7)
鉄器	鉄鎌31(№8~17)	刃子1(№18)
	鉄斧1(№19)	鉄鎌1(№20)

	馬具1対(№21)	な簡単なものである。
装飾品	腕輪1	鉄鏡(7~16) 形式は平根式と細根式(9.12.16)
玉類	勾玉2 切子玉1 金銅環1	の2種ある。完形なのは(13)のみで後は
	算盤玉9 ガラス玉52 小玉168	破片である。鏡の大きさは全長11cm巾 3cm厚さ 0.6cmでえぐりがない。
	七玉2	馬具(18・19)馬具の一部と考えられるが、明確
高坏(1)	坏部の口縁部はやや外反し、口縁部と底部の境界には、少し突出した稜がつく。坏部は無文である。	ではない。特に(18)は表面が鏽いてて明確ではないが、表面に塗銀の跡らしいものがみえる。
	脚は、短脚の部頃に入り、すかしは短形で四方につく。脚の内面のしづこりは明確ではないが、外側に巻き上げ成形を思わせるような凹凸がある。裾を丸くおさめている。	刀子刃 長さ10.5cm 巾1cm 刃部長8cmである きっ先が鋭くとがっている。
高坏(2)	坏の形態は高坏(1)とほぼ同様であるが口縁部と底部の境界の稜はややよわい。脚は、長脚一段すかしで三方につく。全体としては(1)によく似ているが、裾部を丸くおさめず、垂直におろし、角ばらしている。	鉄斧(2) 長さが13.5cm 刃部は巾5cm 重さは 290gである。木柄がつく袋部は、丸くあわせたものである。この部分を刃部とは直交していない。
高坏(3)	坏部は高坏(1)(2)に類似するがごく弱い稜が2本となり、稜の中に波状文の変化したような文様がめぐっている。	鉄鎌(2) 全長14cm 巾2cmを測る。先は大きく内弯している。木柄を着装するための折り返しは刃部に対して直交する。
瓦泉(4)	口縁部のみの破片である。口縁はラバ状に開き、口縁部端に波状文の変化したような文様がめぐっている。	勾玉(22・23)瑪瑙製の勾玉で、勾玉としては小形で、背の部分がやや直線的である。 一方から穿孔している。
高坏(5)	坏部と脚部に分かれて出土したが、ほぼ完形に近い。坏部が脚部に比べて極端に大きく、口縁部は大きく外反する。底部が厚く、二重になっているような稜をつくり、体部を受けている感じを与える。	切子玉(24) 水晶製で18面カットで中央部の稜が直線にならず、カット面ごとに少しづつ食い違っている。一方向から穿孔している。
	脚部は小形ではあるが裾部が大きく拡がっていて安定している。裾部には列点文がめぐっている。坏部脚部ともに丁寧なヘラで表面をみがいている。	算盤玉(25) 水晶製でやや大きいものを小形のと二種類ある。中央の縫ははっきりしている。一方向から穿孔している。
耳坏(6)	隨円状の皿の長軸方向の両端に耳をつけた形をしている。四本の脚が底部についているが、坏部の丁寧なヘラ巻きに比較して、脚は、丸い脚をつけた後にヘラで削って稜をつけただけのよう	管玉(26) 碧色をし、長さ2.9cm~2cmまで、すべて一方向から穿孔している。材質は硬玉製である。
		ガラス玉 色はすべて濃紺である。小玉は黄緑 又赤褐色、紫紺など多色である。
		腕輪 直径9cm・厚さ3mmを測る。材質は金銅と推定せられるが明確ではない。
		耳輪 内径1.2cm・厚さ3mmを測る。表面は剥げてしまっているので、塗銀が塗金であったかは不明である。
		土玉 暗褐色をした土製の玉である。ガラス玉にかわるものである。

【 5 号 墳 】

< 墳 丘 >

5号墳が三基の中で最も残存状態が悪く、工事によって石室より西側が削られてしまい、南側も自然流出で石室の一部が露出していた。また4号墳・6号墳に見られたような屋根を切り込んで墳丘を築造した跡も見られなかった。このような状態であるので、墳丘の規模は全く不明である。

< 石 室 >

石室も大規模な盗掘を受けて、根石を玄室側で7個、羨道部側で2個、玄室と羨道部の境に2個残すのみであった。規模は石室全長4.56m、玄室長3.1m、巾奥壁部1.1m、中央部1.15m、袖石付近0.7m、羨道長1.46m、巾0.65mである。石室が図のように西側が直線で東側が玄室中央部で内側に曲り、羨道部から主軸に対して平行になる。このようにやや変則的ではあるが片袖式石室を意識しながらの無袖式石室と考える。根石に使用されている石は4号墳に使用されている根石よりやや小さい砂岩の河原石である。石室の構築状態は図のような状態であるのでほとんど不明であるが、石室の巾よりやや広く尾根を掘り切り、根石を固定するための巾20cm、深さ10cmの溝を掘り、そこに根石を固定する。一部には根石の大きさにあわせて少し掘り込んでいる部分もある。玄室と羨道の境には2個の境石をおいている。玄室内には4号墳6号墳同様砂利が厚さ10cmほどに敷きつめてあるが大きさがやや不揃いである。羨道部にはこのような敷石はない。

前庭部には羨道端から深さ20cm巾40~90cmの溝が掘られている。

< 遺物出土状態 >

出 土 状 態

全体として玄室西側に多く出土した。玉類は奥壁付近に散乱した状態で出土し、その多くは敷石の間に落ち込んでいた。中型甕の体部と壺が一群として出土し、1m近く離れて、壺の破片数個体分と提瓶の体部片が出土した。鉄器類

は羨道端より散乱した状態で出土し、鉄斧は根石掘り方内から出土した。このような状態から、遺物は盗掘の際、擾乱されたものと考える。

遺 物

- | | |
|-------------|--|
| 須恵器 | 高环2 壱7 器台1(子) |
| | 提瓶1 中型甕1 |
| 鉄 器 | 直刀1 鉄鎌5 刀子4 鉄鎌1
鉄鋤1 |
| 壺蓋(1) | 天井部と口縁部をわける凹線は明瞭である。天井部に丸味がなく、口縁部端部は内傾する面を有し、稜をつくる。天井部内面に同心円叩き文が認められる。ヘラ削の部分は全体の1/3程度で、方向は逆時計まわりである。 |
| 壺身(2) | 立ちあがりは約1.5cmで、受部端部とともに丸くおさめている。底部へラ削りの部分は1/3程で、方向は逆時計まわりである。 |
| 器台(3) | 脚部のみ出土した 形のすかしが三方に二段にあり、その間は稜の明確な突線でくぎっている。底部へラ削りの部分は2本の突線がある。 |
| 直刀(4) | 現存長は刀部が21cm、茎部が7cmを測る。巾は刀部3cm、茎部2cm、厚さは0.9cmである。茎には木質が付着している。 |
| 刀子(5) | 茎が一部欠失しているが、刀部は完存している。刀部長16cmを測る。全体に木質が付着している。背は真直できっ先は鋭い。刀子としてはしっかりしており、刀子が日常の万能工作用具であるのに対して、これは武器であろう。 |
| 刀子(6.7.8) | 破片ばかりである。茎にはすべて木質が付着している。(8)は刃がやや内反しているが他は真直である。 |
| 鉄鎌(9.10.11) | かえりを有するもの(9.10)とないものとがある。茎は二段になってしまおり、先の細い部分が軸に入り込 |

んでいたものであろう。

鉄鎌② 長さ19cm、厚さ0.5cmで刀部はもとが広く(3.5cm)、先へいくほど細くなりながら、大きく内彎する。刀と木柄着装のための折り返しとはほぼ直交する。

鉄鎌③ 大型のU字型鉄製鎌先である。約1.5gが欠失しているが、さしわたり26cmはあったと推定される。木をさし入れる袋部はしっかりしており、刃は一方のみについている。

勾玉 灰青色をした内面が扁平なガラス製の勾玉である。穿孔は一方向からのみである。

管玉 質のよい玉類のものと、質が悪くて風化しかかった硬玉製のものとある。

【6号墳】

〈墳丘〉

5号墳のうえ標高57m程の尾根上に位置する。墳丘上には雨神様の祠が建っており、祠の根石に4号墳・5号墳でみられたような砂岩の河原石が多數使用されていたので、盜掘を受けていることは明らかであった。墳丘両側の自然流失が著しく星のようになっていた。墳丘の状態を調べるために尾根と平行にトレンチを入れた。石室より西側、すなわち尾根の下側では墳丘を画するような溝はみられなかったが、石室より東側では、現地表から約1mの溝がみられた。この溝の築造時の深さは約0.8m程であった。墳丘の築造は4号墳と同様に尾根を大きく掘り込んで墳丘の下半分を造り、墳丘を画すために掘った溝の土を利用して上半分を盛りあげたものと推定される。事実東半分の墳丘には赤褐色土の層が見られたが、この赤褐色土は地山のものである。墳丘の下にあたる部分も地山を削って整形しているようであるが、あまり大規模には整形してないようである。少し整形した後右室のための掘方を掘っているのである。

墳丘の大きさについては、墳丘南側の流失が著

しいので明確ではないが、石室主軸から墳丘東側の掘り込みまで約6mあり、墳丘の直径は約12mと推定される。墳丘の高さについても盛土の流失や盗掘を受けているため明確ではない。石室の基底部と墳丘東側の掘り込みとのレベルがほぼ一致しているので、石室基底部から現在までの高さは、約1.3mを測る。墳丘の盛り土は墳丘西側が灰褐色をして非常に重い土で層がこまかく築造されているのに対し、東側は地山を削った土をただただきしめた程度の堅さで、層自体も大きい。

〈石室〉

6号墳も大規模な盜掘を受けており、残存していたのは羨道部の一部と玄室の東側根石のみであった。羨道部は側壁の石がすっかり取りはらわれていたのではなく、大部分の石が内側に落ち込んでいた。また羨道部の天井石と考えられる長さ約1m、巾0.7mの石、長さ約0.8m、巾0.6mの石が内側に落ち込んでおり、他の石は二つに折れた状態で外側に投げ出されていた。

石室は奥壁に向かって左側のみに袖を有する片袖式の横穴式石室である。主軸は尾根と直交し(N40°Eの方向に開口する)。石室の大きさは、石室全長約4.2m、玄室長2.7m、巾は奥壁部で1.4m、袖石部で1.1m、羨道部長1.5m、巾0.8mを測る。石室のプランは4号墳とよく似て、玄室の奥壁部が広く袖石部が狭い。石室の高さについては、羨道部は現状で約0.7mあり、羨道を閉鎖するように落ち込んでいる石群から推定すると、築造当時は1mを少しこえる程度ではなかったかと考えられる。そこから推定すると玄室の高さは1.5mを少しこえる程度ではなかったのだろうか。

石室構築状態については、石室の大部分が破壊されてしまっているので、現存している羨道の一部や、掘方、根石プラン等から推定するより他にない。まず、地山を長さ約5m、巾奥約2m、深さ約0.5mと石室よりやや大きめの土壙を掘る。次に石室の根石を固定するための巾30cm、深さ10cmの溝を掘り、石室穴にたまる水

を排水するための溝もこの時同時に掘る。この溝に根石を溝と平行に入れて固定する。根石には長さ約50cm 厚さ巾とともに約20cmの石が使用されている。袖石には50×30×20 の石が主軸と直交するように立てられていた。袖石を固定する溝もこのように掘られていた。二段目の石が漢道部東側では根石の上に、根石と平行に横まれ、三段目以上が小口積みになっている。西漢道側壁は二段目から根石よりやや小さい石が小口積みになっていた。漢道部の西側漢門部では、根石のかわりに灰色の非常に堅い土をおき石を半分埋めて固定していた。根石を用いずにこのように土を使用したかは不明である。

漢門にあたる西側根石は内側が弧になっておりあきらかに漢門を意識しているにもかかわらずただ、根石プランのみである西側の漢道部がやや短くなり、土盛りの上の石積みまで含めると東側の漢道が少し短くなるのである。

石室内には玄室と漢道の玄室寄りに砂利が厚さ15cmに敷かれていた。砂利は大きさがまちまちで、漢道部には、直径が2~3cmの細い砂利、玄室の漢道部寄りには、こぶし大よりやや大きめの砂利が、奥壁よりにはこぶし大の砂利が敷かれていた。

排水溝は奥壁から石室のほぼ中央部を貫いており、長さ5.7m、巾2.3cm、深さ6cmを測る。排水溝は、奥壁根石端方から掘られており、根石掘方を掘った時に同時に掘ったものであろう。排水溝は奥壁から1.5m 漢道側によつたあたりからゆるいカーブをえがいているが、これは、玄室が矩形でないのに中央部を貫くために意識的に曲げたものであろう。排水溝には全体にわたって蓋石があったが、漢道部の玄室より0.7m程は蓋石がなかった。これは、蓋石が抜きとられたのではなく、築造当初からなかったものである。

これら排水溝の蓋石の上に砂利が敷かれていた蓋石に使用されている石は30×20×5cm程の砂岩の河原石である。

漢道に続く前庭部については、排水溝との関

係もあって、漢道部床面自体も側壁根石基底部より10cm程低くなっているのであるが、ほぼ漢道部と同じ巾で1.2m程排水溝が続いている。この排水溝が切れる所から、溝巾がやや狭くなり溝を一段掘り下げる。この一段低くなった溝はやや西側に曲っており、長さは1.2m程で、そしてその端は西側へは大きく開くが東側へは少しあしか開かない。

なお墳丘築造とも関係するが、漢門のあたりからは、排水溝自体、地山に掘り込んでいるが前庭部は盛り土である。すると、墳丘の築造の際に地山を掘りその土を利用して前庭部をもふくめた石室部をやや平坦に造ったものと推定される。

< 遺物出土状態 >

出土状態

全体に散乱した状態で、提瓶は奥壁付近から台付直口壺は、東側壁中央部からと袖石付近から出土した。出土した壺のすべては、石室外の東側墳丘トレチ表土面下から、鉄製鋸先も同トレチ内の擾乱層から出土した。これらの遺物は、盗掘の際石室の外へ投げ出されたものであろう。従って原位置をとどめている遺物はない。

遺 物

- | | | | |
|-------|------------------------|---------------------------------|-------------------------------------|
| 須恵器 | 坪耳6 | 蓋9 | 台付直口壺2 |
| 鉄製鋸先 | 刀子3 | 鉄先1 | |
| 管玉(1) | ガラス玉1 | | |
| 环蓋(1) | 天井部は扁平で、天井部と口縁部を | わける稜線は明瞭である。口縁部は内面に凹みをつくる。ヘラ削りは | 天井部の $\frac{1}{3}$ 程で、方向は逆時計まわりである。 |
| (2) | 天井部と口縁部をわける稜はにぶく | あまり突出しない。口縁部はやや外反し、端部内面に凹線をつくる。 | |
| (3) | (2)に極似する。 | | |
| (4) | (1)に似ているが口縁部の外反がやや大きい。 | | |
| (5) | 天井部が丸くなり、天井部と口縁部 | | |

- を分ける稜はほとんど目立たず、凹線に近い。口縁端部は内傾し、端面の内・外でわける稲は明確である。
ヘラ削りは荒さがめだつ。
- (6) (5)に極似する。
- (7) 天井部が扁平なことなど(2)(3)に似る。
- (8) 天井部が丸く、(5)に似る。
- 坏身(9)** たちあがりは約1.5cmあり、やや内傾する。端面は内側に傾斜するが、概ね丸くおさめている。受部はやや外上方にのびる。底部は扁平で削りは全体の $\frac{1}{3}$ 程度で方向は逆時計まわりである。
- 00 たちあがりは少し内傾し、(9)より低い。受部はほぼ水平にのびる。ヘラ削の荒さが目立つが、全体に丸みをおびる。
- (11) たちあがりの内傾度は大きくなるが高さはあまり変化がない。受部はほぼ水平にのびる。底部は丸い。
- 02 たちあがりの内傾度はやや大きいが端部内面は外反気味である。たちあがり接合あとがよく観察できる。受部はわずかに外上方にのびる。底部は丸く、ヘラ削の荒さが目立つ。
- 03 たちあがりはやや大きく内傾するが端部近くは、直立に立つ。受部はほぼ水平にのびる。底部はやや扁平でヘラ削り面は $\frac{1}{3}$ 以下である。
- 04 たちあがりは大きく内傾し、高さも約1cmと低い。端部の丸みが目立つ。受部は、外上方にのびる。底部は丸く、ヘラ削りは $\frac{1}{3}$ 程度である。方向は逆時計まわり。
- 坏蓋(10)** 天井部は丸く、天井部と口縁部をわける稜や凹線は全く認められない。口縁端部は丸くおさめている。
- 台付直口壺(11)** 口縁部は、ロート状で端部は丸くおさめている。体部は肩の張りがややなだらかである。施文は全く見
- あたらないが、ナデ調整が丁寧で、自然釉がほぼ全面にかかっている。脚部は欠失しているが、三方向に矩形のすかしの跡が観察できる。
- 台付直口壺(12)** 口縁部はやや外反し、端部は丸くおさめている。体部の肩の張りはなく、体部最大径は下にさがる。脚部は握部で多きく開き、端部にはくの字形の凹線が認められる。表面は横ナデ調整し無文である。
- 提瓶(13)** 口頸部は短く外反し、端部は外面が内傾し、口縁部と頸部とは明確な稜で分けている。口頸部と体部とは真直につかず、角度をなす。体部前面は少し角ばった形でふくれ、背面はやや丸味をもっている。肩両側には鉤状に屈曲する耳がついている。体部背面には回転を利用したカキ目が施されている。
- 鉄鎌(19~24)** (19)は三角形をなし、厚さが薄い
(22)は厚めで大きな反りを有する。
- 刀子(25~26)** いずれも欠失部が大きく、十分な観察は行えない。凶の木質部は断面が筒型をしている。
- 鉄劍(27)** 外側さわわたしが17cmで、袋部と刃部とつりあいがよくとれている。刃は両面にある。

3 結び

1号墳調査で確認された特色には、(1)須賀支群の存する尾根の支尾根先端に立地すること。(2)墳丘直径が10m以下の小古墳であること。(3)調査された石室の他にも、石室もしくは他の埋葬施設があるのでないかと推定されること。(4)天井石が築造当初からなかったのではないかと考えられること。(5)石室奥壁両コーナーが放射状に積み上げられていること。(6)調壁に使用されている石に比べて袖石が極端に大きいこと。(7)敷石が砂利と板状石の二重になって

いること。があげられる。築造年代については良好な資料が得られなかつたが、平瓶が出土しやや古い様相を示すものはないこと、二個出土した提瓶は小型化し、耳が退化してしまつて、跡さえなくなってしまつてのことから考えて橋崎氏作成の編年表で炭焼期にあたり、田辺氏陶邑によればⅡ期の終りTK 209にあたると推定したい。絶対年代をあてることは困難だが、あえて推定するならば、7世紀後半とすることができるよう。この推定された年代と、天井石がなかつたのではないかとの推定から導き出されることは重要である。すなわち、横穴式石室墳は、その構造から追葬を前提とする家族墓として受け入れられていったと考えられているが、天井石がないことはこの追葬を前提とせざりに1号墳が築造されたことを物語る。すなわち形式的に横穴式石室を用いたことになる。ただし、他に埋葬施設があることも推定されているから追葬がなくなったとは言えない。母神山古墳群には天井石がない古墳が三基みつかつており、そのうち黒島林1号墳は、この古墳よりやや下る時期で、鎌子支群15・16号墳は8世紀に近い年代が推定されているものである。このような点から、あえて推定すれば、三島では7世紀に入ると、横穴式石室墳が家族墓として意識されなくなりはじめ、1号墳はその早い時期の一基ではないだろうか。

- 大規模な盗掘を受けていたため、石室構築方法など、わからぬ点が多いが、次の点が4号墳の特色としてあげることが出来る。
- (1) 墳丘の規模が直徑約16mと推定され、直徑12~13m以下の小円墳が多い母神山古墳群の中では、やや大きい部類に属すること。
 - (2) 石室開向方向がN 40°Eと、これも南側に開口する例が多い母神山古墳群の中では異例の部類に属すること(3基共通)
 - (3) 墳丘のわりに石室が全長6.35m巾1.6mと小型であること。
 - (4) 石室袖石が、柱状の石を立てている例が多いのに対して、板状の石を平板においている。

こと。

- (5) 玉類の副葬が多いこと。
- (6) 土師器が副葬品されていたこと。(5・6号墳には土師器の破片も検出されなかつた。)築造年代を決定するような遺物はなかつたが、腹の口縁部の破片から、橋崎氏の編年表によれば、福田期にあてることができる。田辺氏の陶邑によればTK-10期にあてることができる。短脚の高杯があることが気になるが、脚のつくりは単に脚の長短の差だけではなく、脚部のつくりは長脚高杯と同じであり、時期差を感じさせず、同時期に短脚と長脚が存在したことを示している。

5号墳は墳丘、石室ともに小型で、石室ブランクも、片袖式を意識しながらも、きちんとした片袖式石室にはならず、大きな角度をつくっている。その他の部分は基本的に他の2墳と同じである。

築造時期は、出土した須恵器から橋崎氏の編年表によれば、岡期にあたり、田辺氏の陶邑によれば、TK-10期にあてはめることができよう。

6号墳の特色は、なんといっても石室を貫く排水溝を有することである。4号墳にも排水溝らしき溝が石室の一部にあったが、6号墳ほどはっきりとした排水溝ではなかつた。石室袖石が板状の石を立ててあった点が4号墳と異なる程度で他は基本的に同じである。

石室築造時期については、出土した環が二型体にわけられ、古い方の环は橋崎祝の編年表によれば岡期、田辺氏の陶邑によれば、MT-15期にあてることが出来る。新しい方の环は、海北塚期・TK-43期にあてることが出来る。古い方の环とやや新しい時期に属する环身とは一括してトレンチから出土したが、新しい時期に属する环身は前庭部上層から出土した。なお提瓶台付直口壺(4)は、岡期MT-15にあたり、台付直口壺(5)は海北塚期TK-43期にあたると推定される。これらの点から、6号墳には追葬されたことが予想される。ただ盗掘で遺物が原位置にはなかつたことなどから、明確なことは

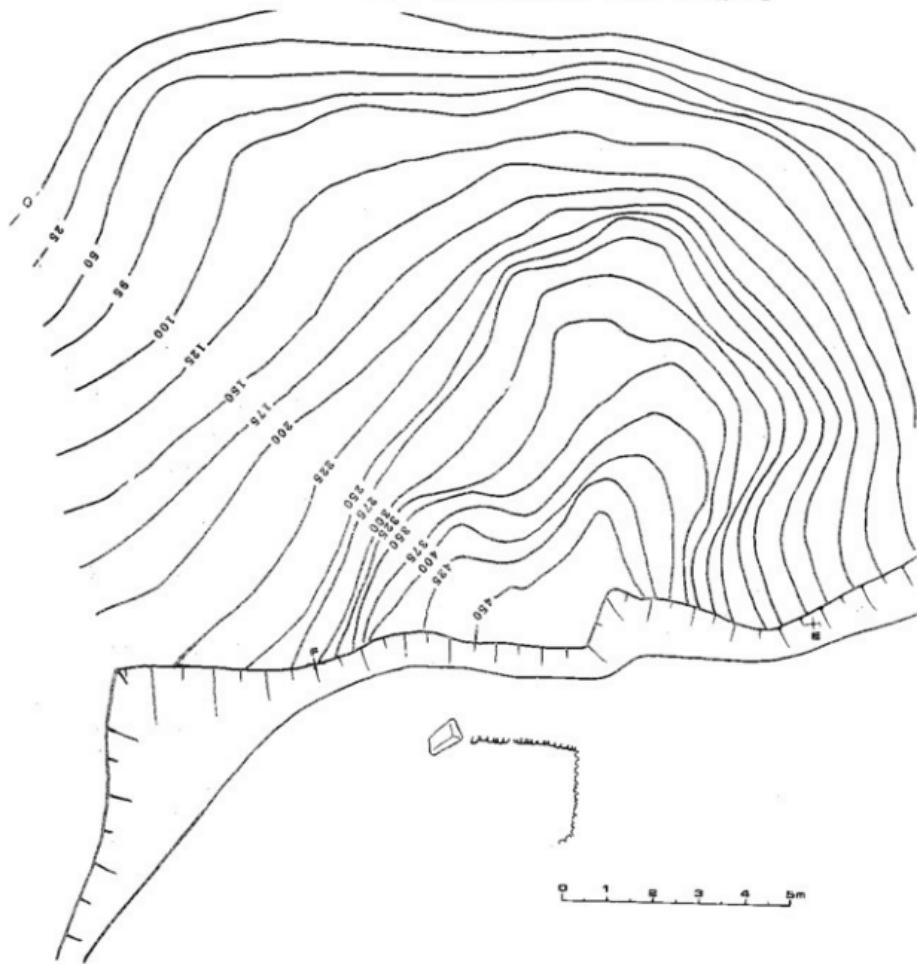
言えない。

以上の点から、6号墳・5号墳・4号墳と七
から順次築造されたことが推定され。古墳の基
本的な点が同じであることから、同一の家族、
もしくは同族のものが經營していったと考えら
れる。また、6号墳の築造年代が、同期、MT
-15期と推定されたが、もし絶対年代をあてる
とすれば6世紀前半となり、管見の範囲では、
母神山古墳群内では最も古い部類に属する。

母神山古墳群 千尋支群附近の古墳と地形図



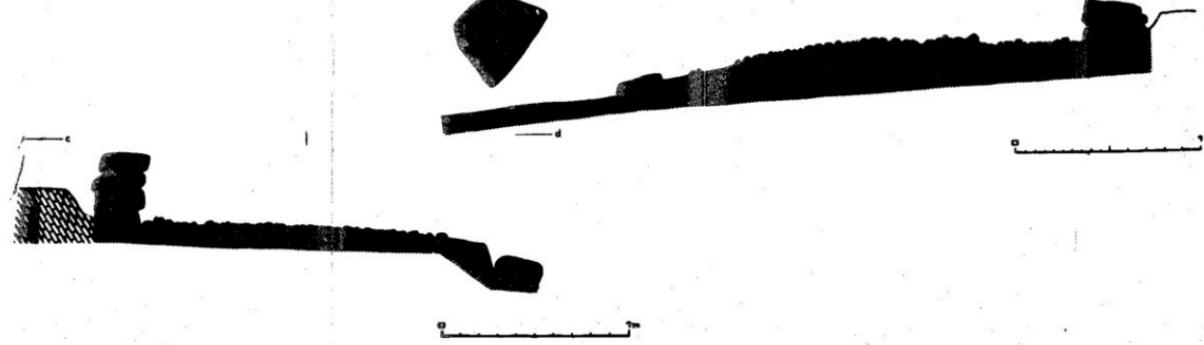
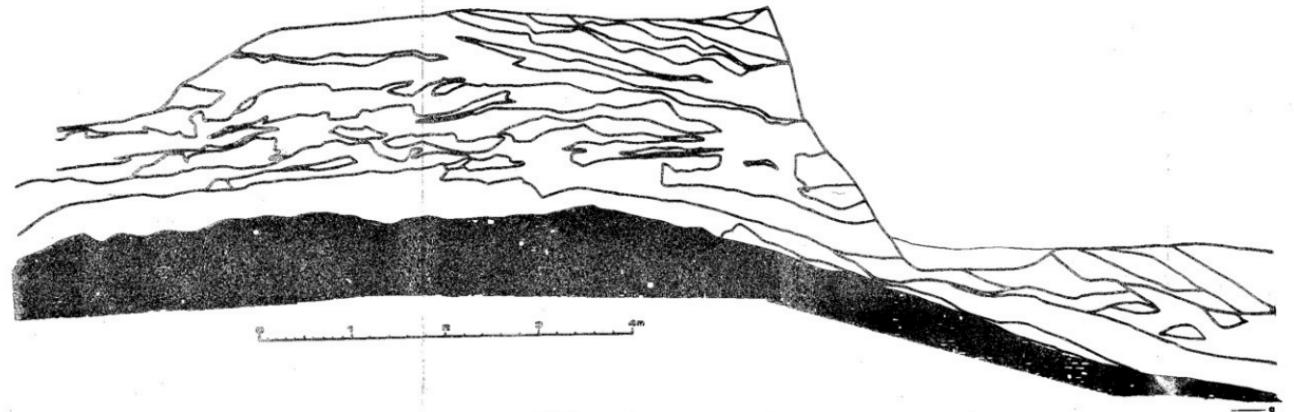
第2図 千尋支群第1号墳附近測量図 縮尺 100分ノ1



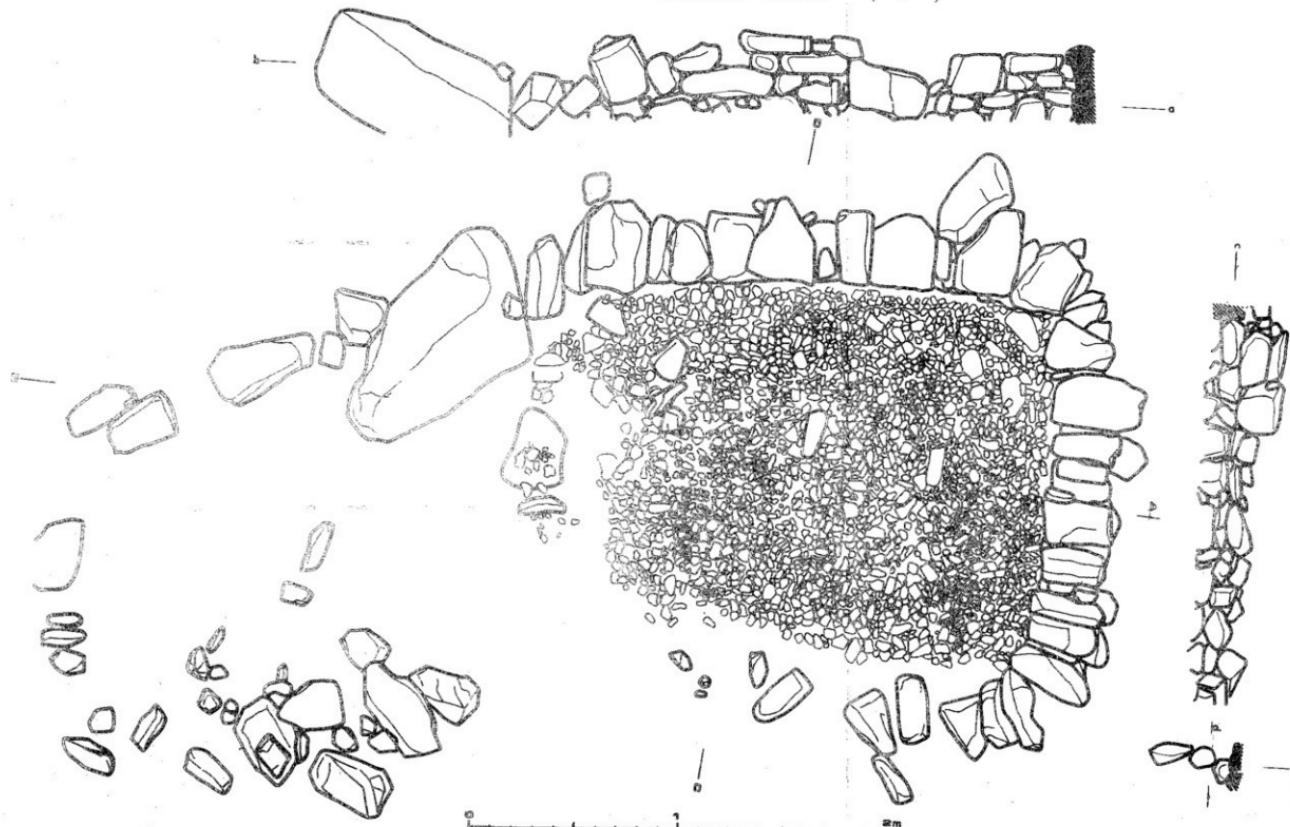
第3図

同上

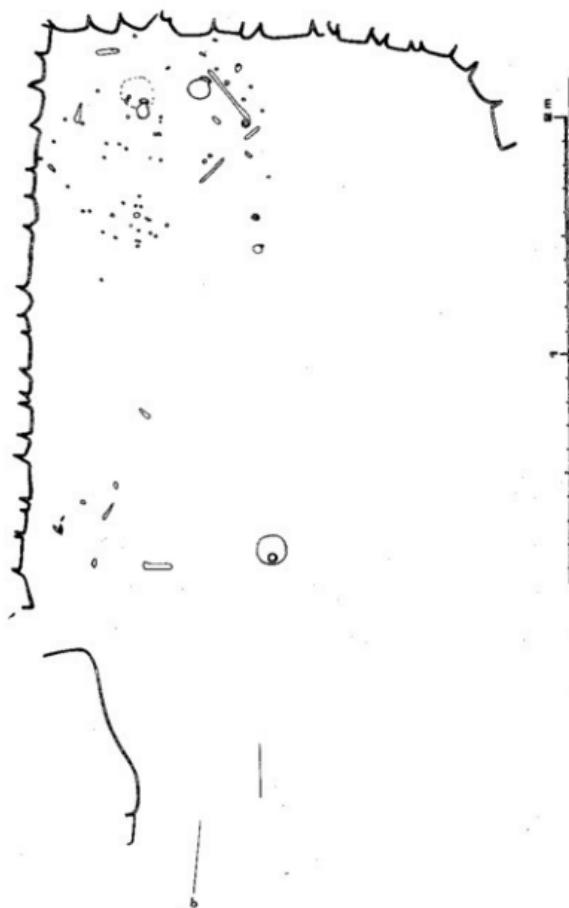
地層断面・石室縦横断面図



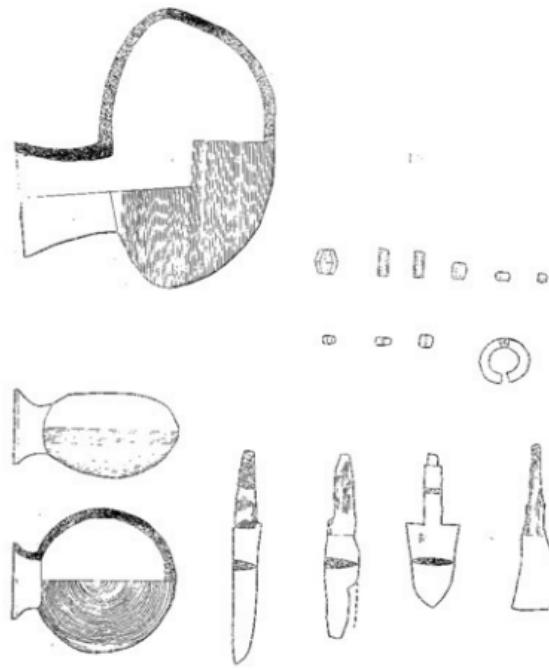
第4図 同上 床面実測図・側壁測図 (カ)



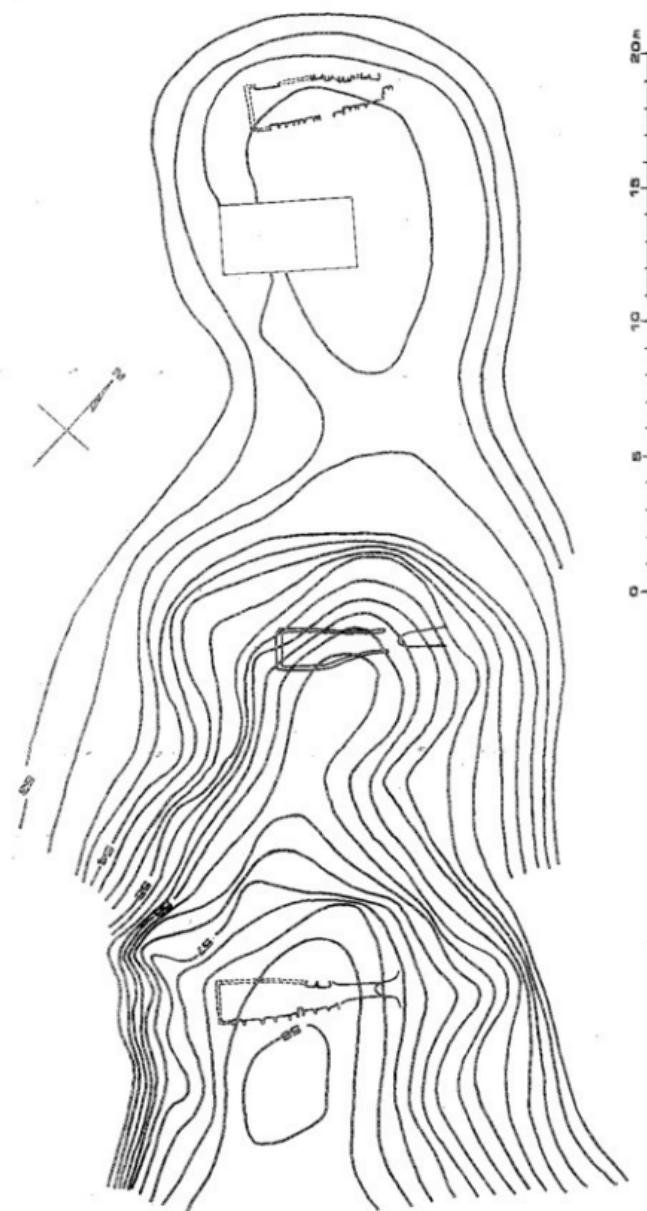
第5図 同上 遺物出土状況図



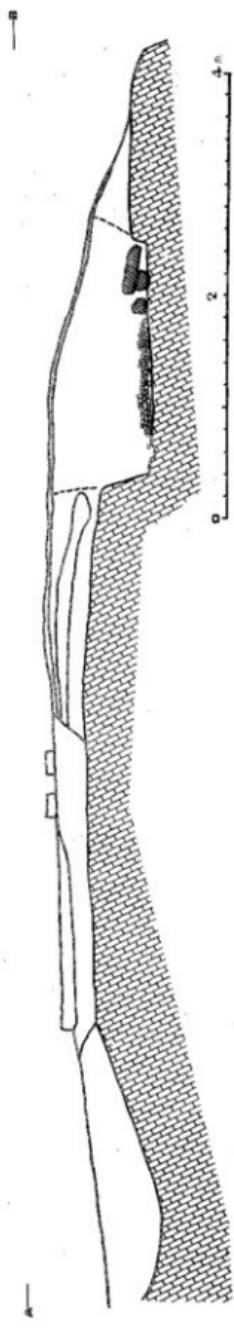
第6図 同上 出土品実測図



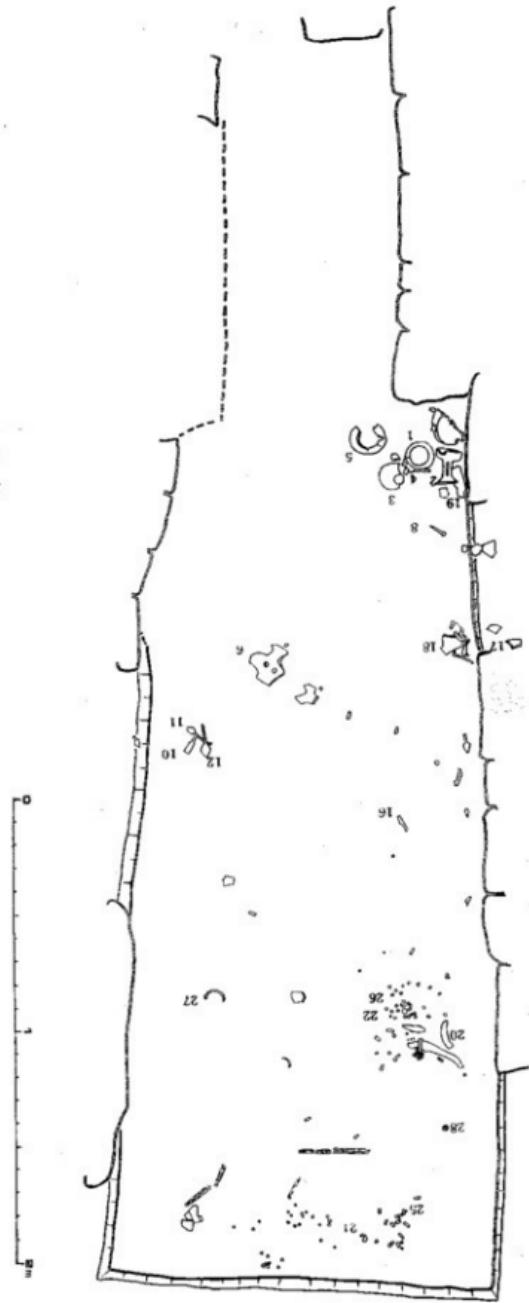
第7図 千尋第4.5.6号墳附近測量図



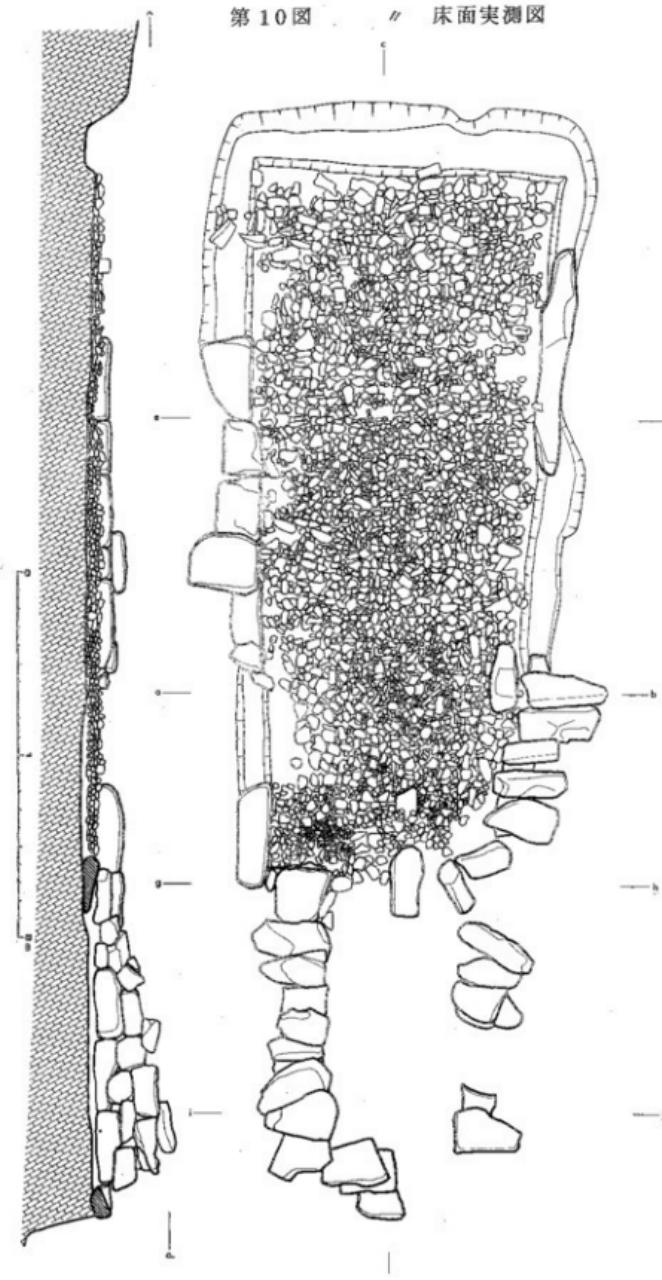
第8圖 第4号墳断面図



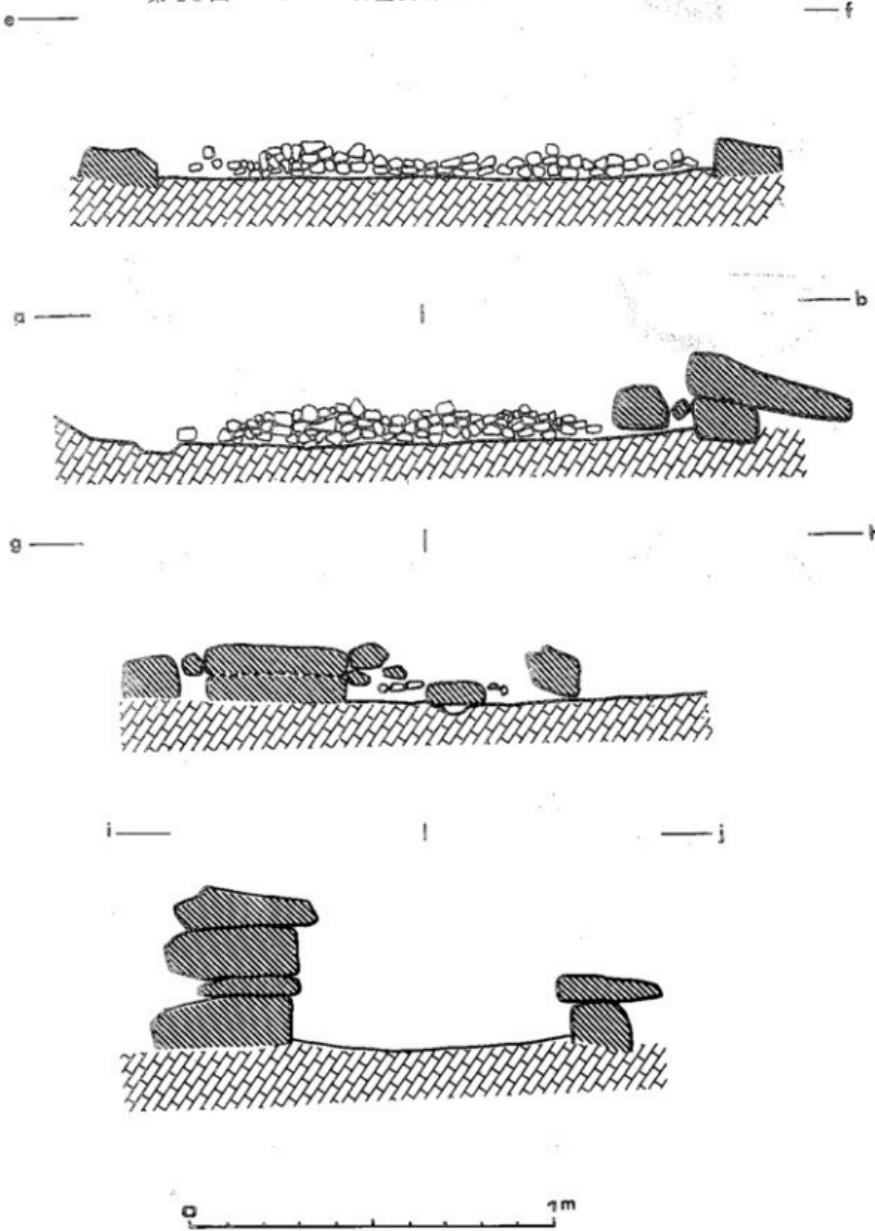
第9圖　“遺物出土狀況圖”



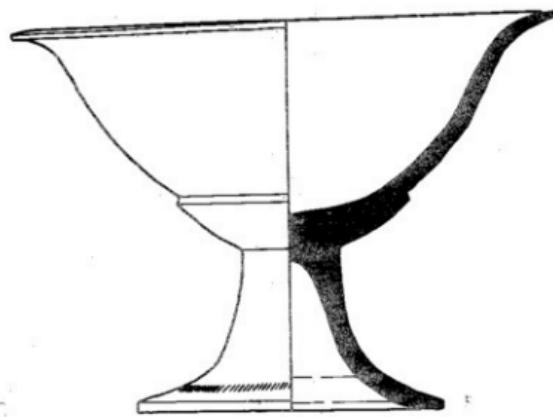
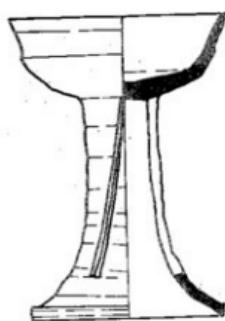
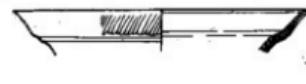
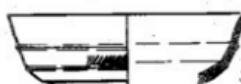
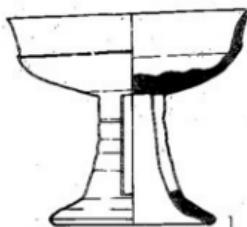
第10図 ハ 床面実測図



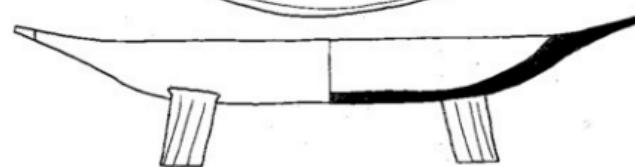
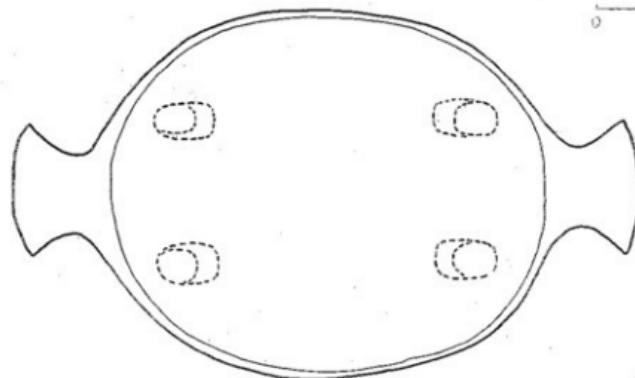
第 11 図 石室横断面図



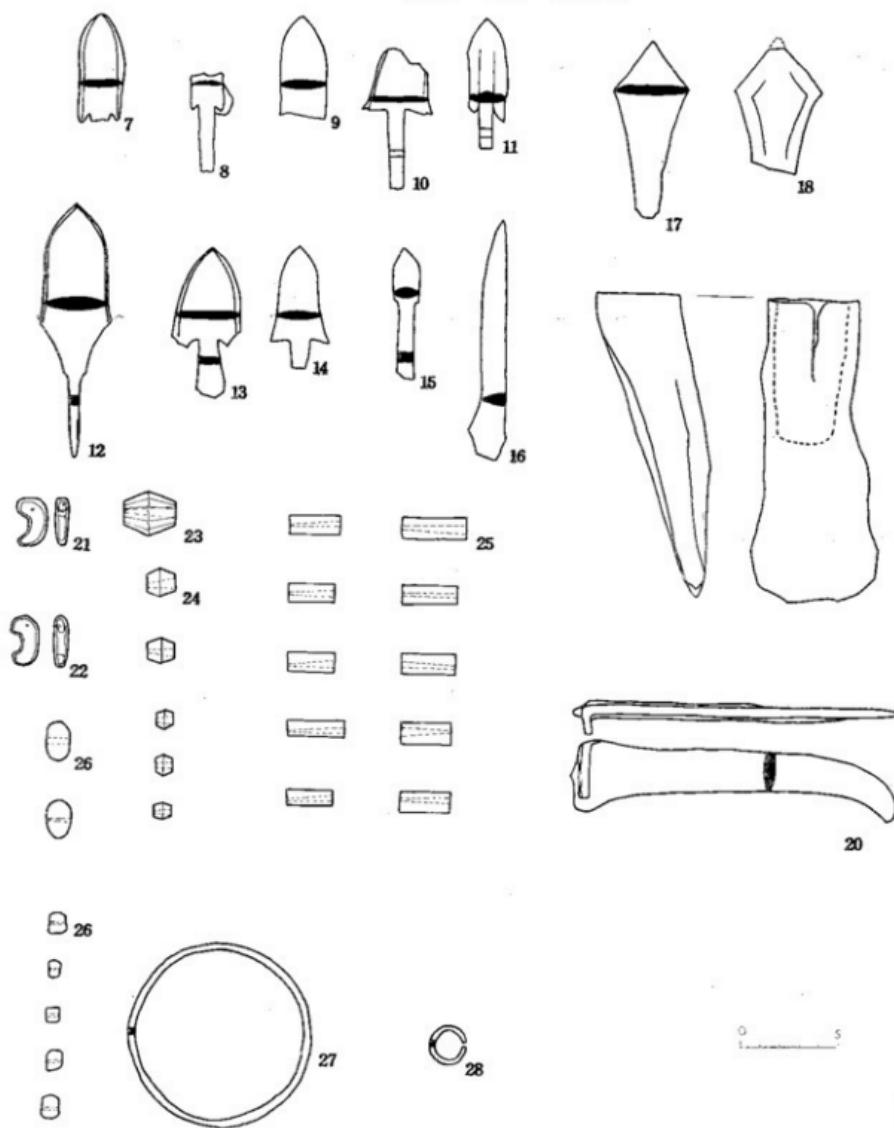
第12図 第4号墳遺物実測図（須恵・土師）



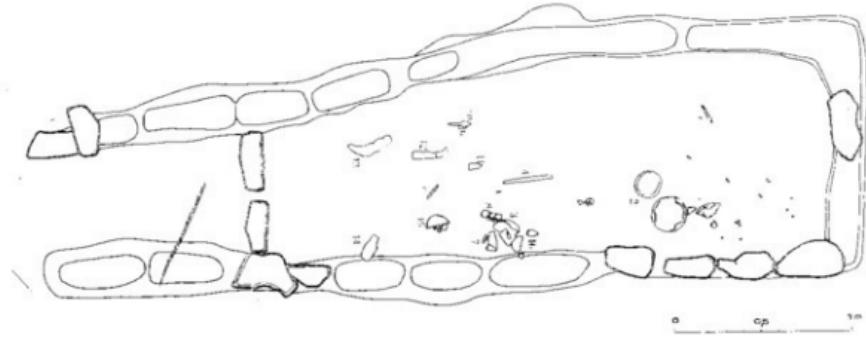
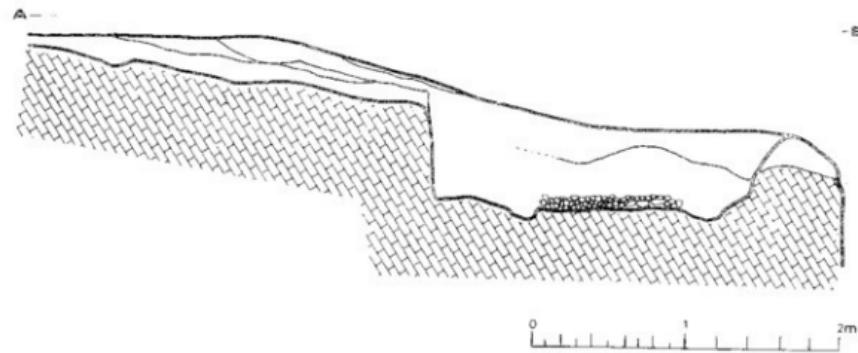
0 5



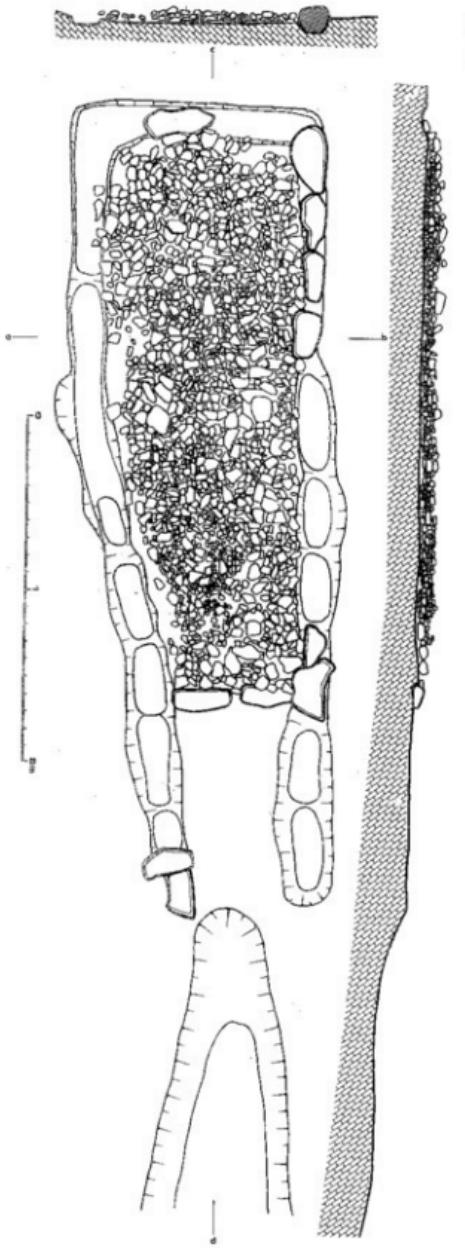
第13図 // 同上 (鐵鎌・玉類・装身具)



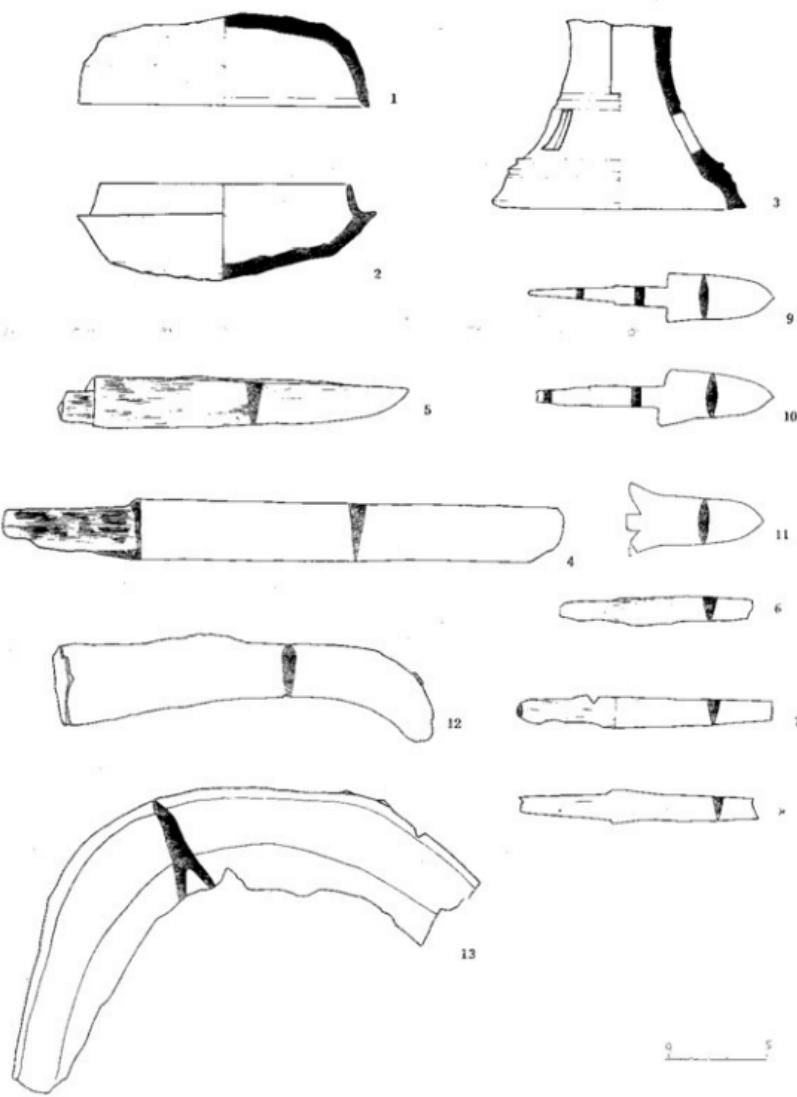
第14図 第5号墳断面図・遺物出土状況図



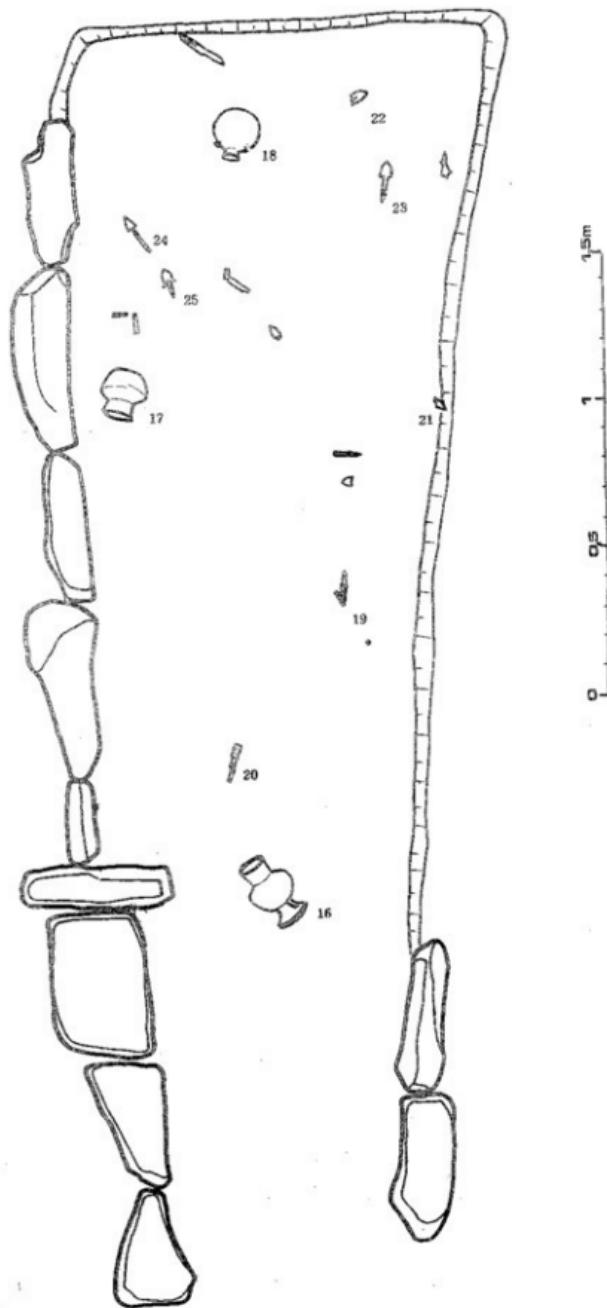
第15図 ♂ 床面実測図



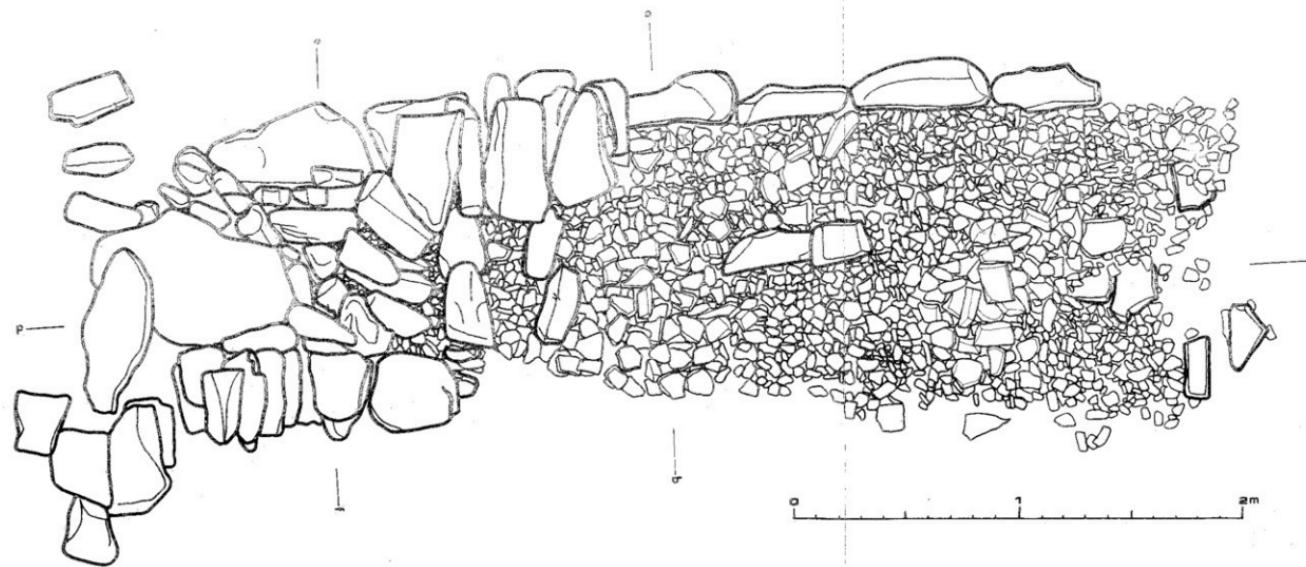
第16図 遺物実測図



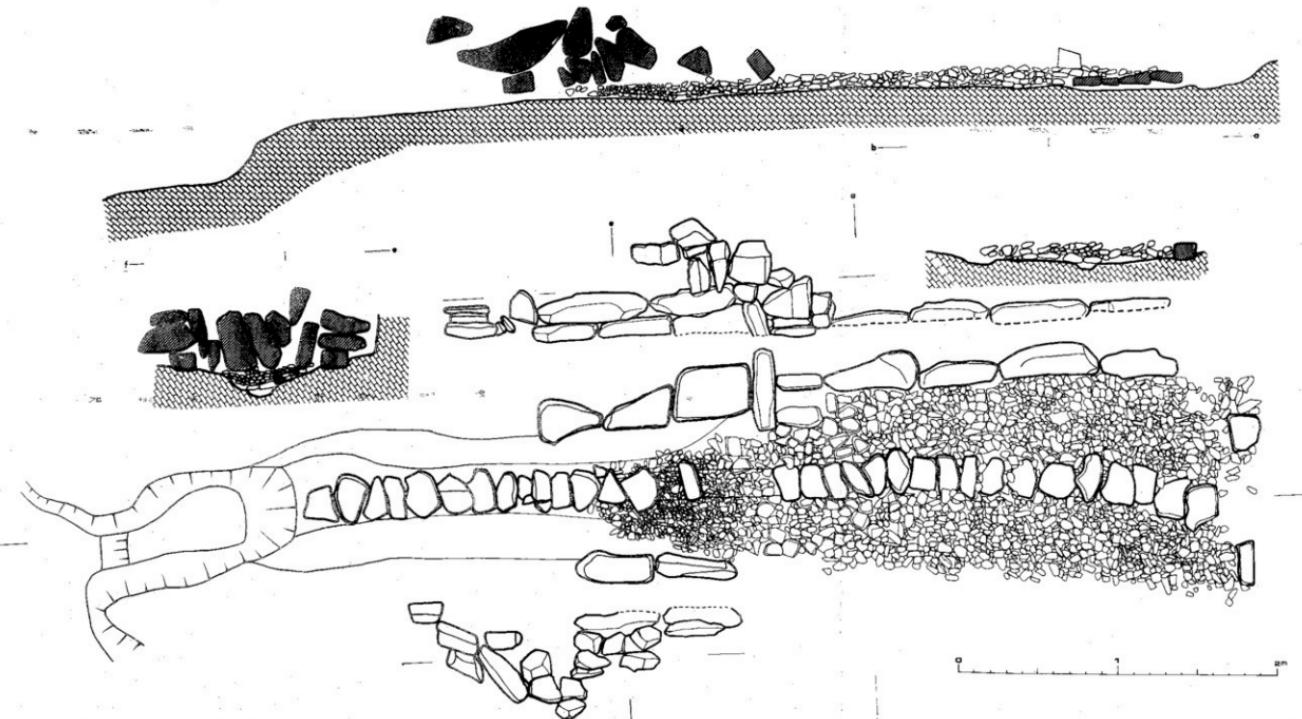
第17図 第6号墳遺物出土状況図



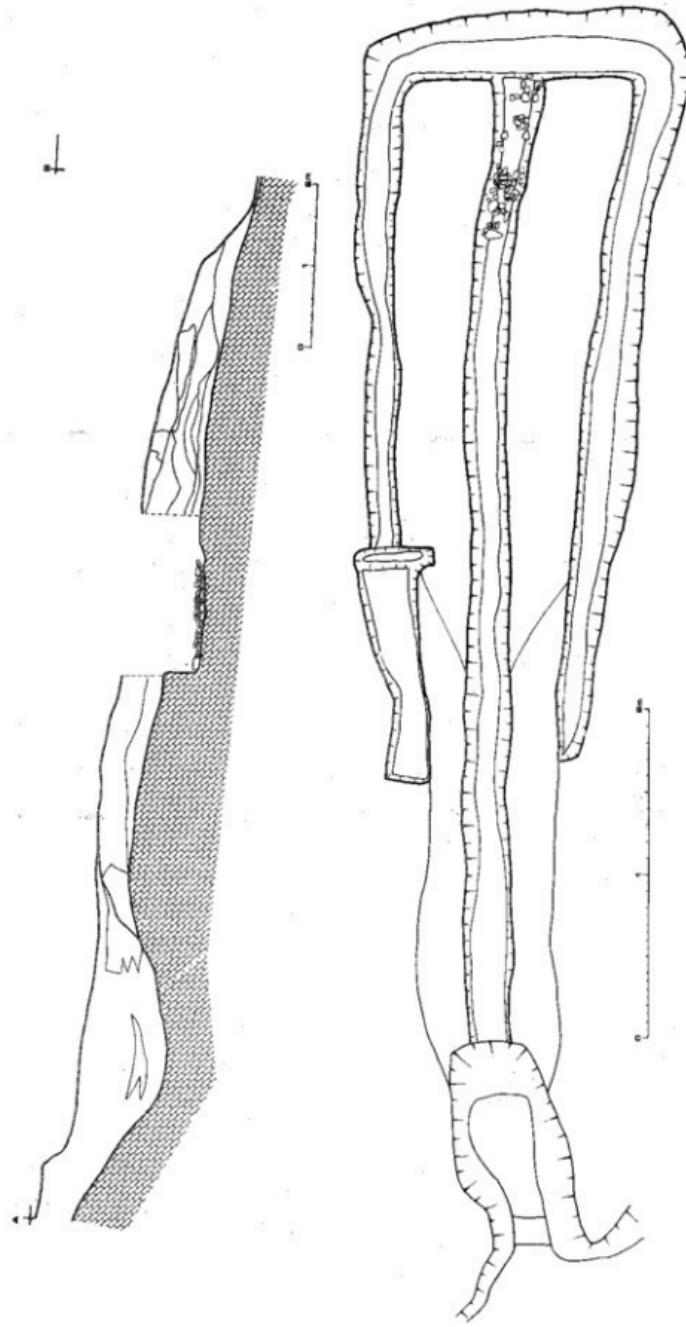
第18図 ハ 第1床面実測図



第19図 第2床面実測図・石室凝斯・狭道横断図(折り込み)

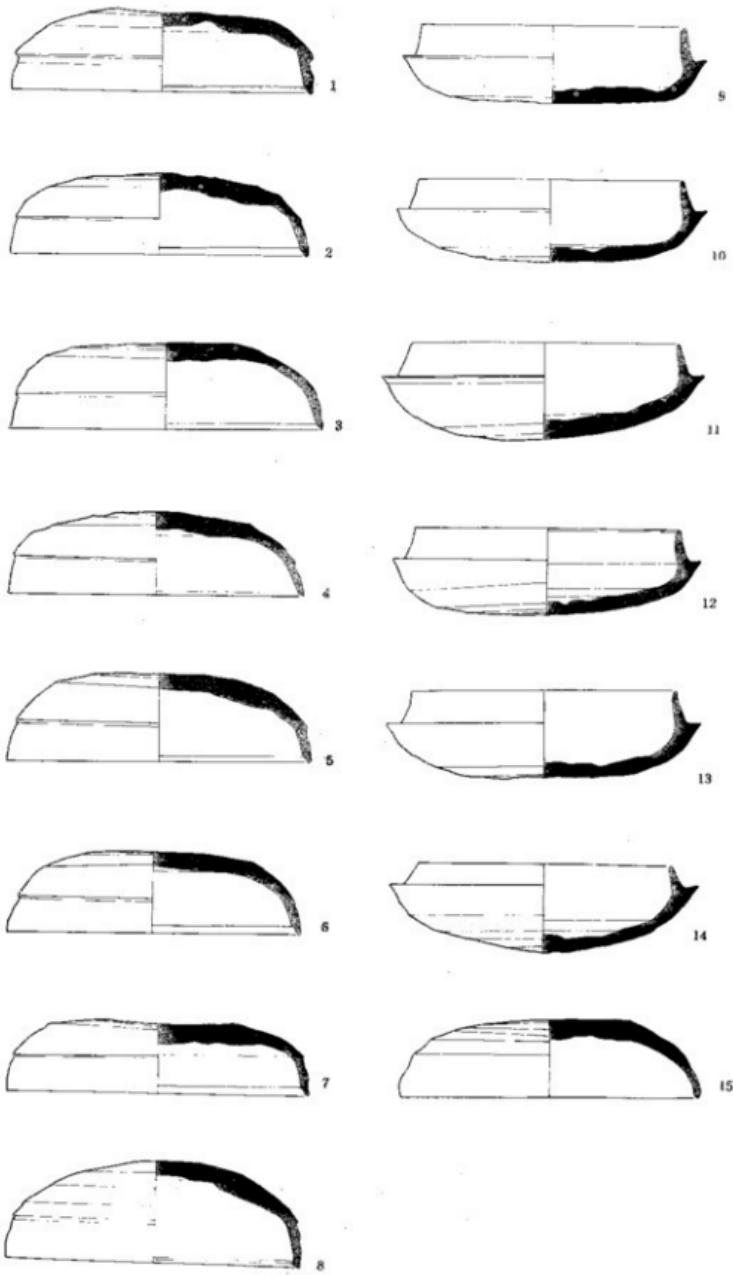


第 20 図 “掘方実測図・石室横断図

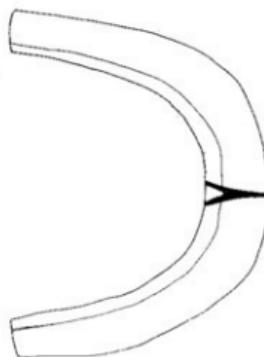
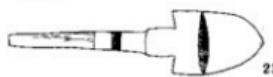
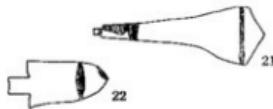
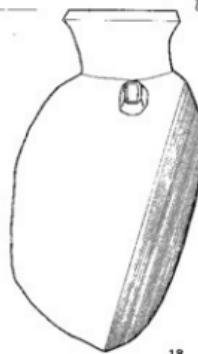
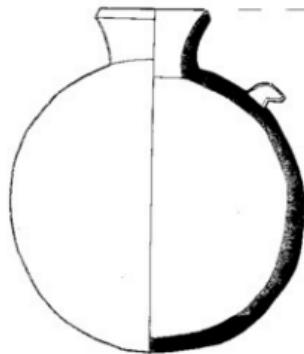
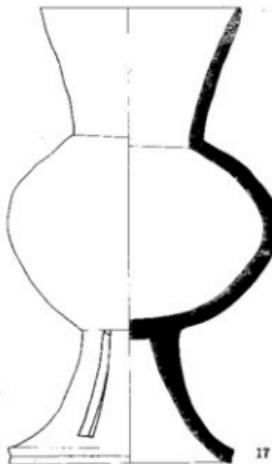
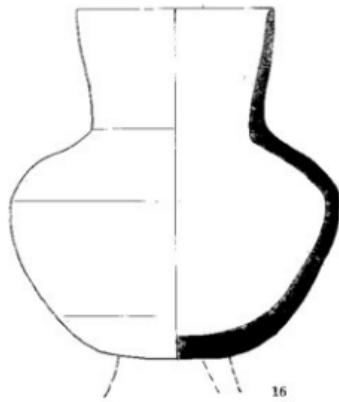


第21図

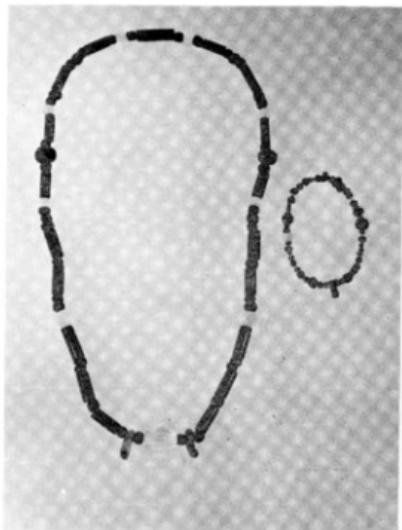
遺物実測図（壺の身と蓋）



第 22 圖 同上 (須惠器・鐵鎌)

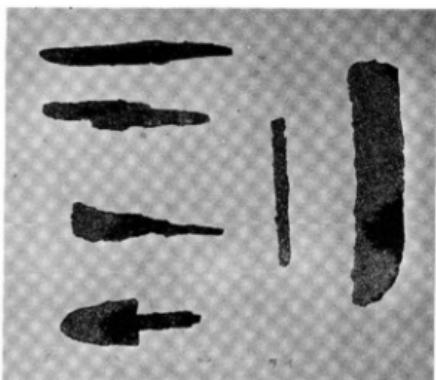


図版 2



勾玉 左 2.1 cm 右 2.2 cm

(1) ⑩
切子玉、管玉、穿孔玉

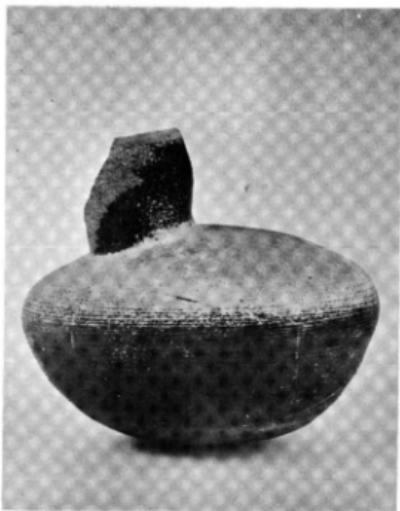


(1) ⑪
右 刀子 12.4 cm
刀子、鉄鍊、鑿



切子玉 1.4 cm 左 平玉 9 mm

(2) ⑫
切子玉、管玉、穿孔玉
 $5+9=24$



〔高さ 14.7 cm〕 平瓶

(2) ⑬

図版 3



〔高さ 10.5 cm〕

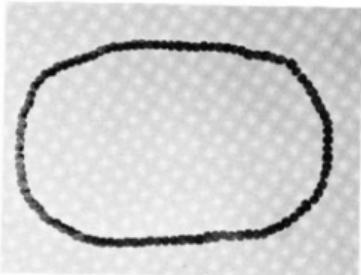
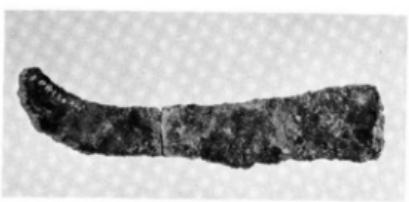
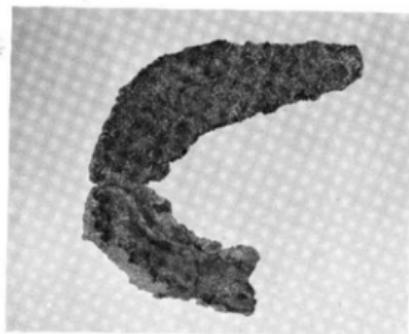
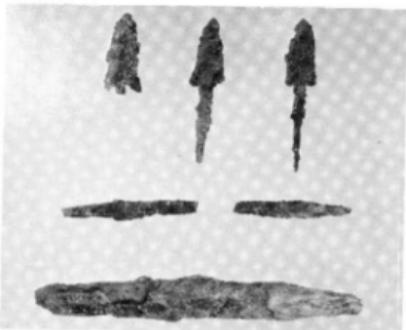


〔高さ 14.8 cm〕



〔高さ 19.2 cm〕

図版 4



図版 5



17.1 cm



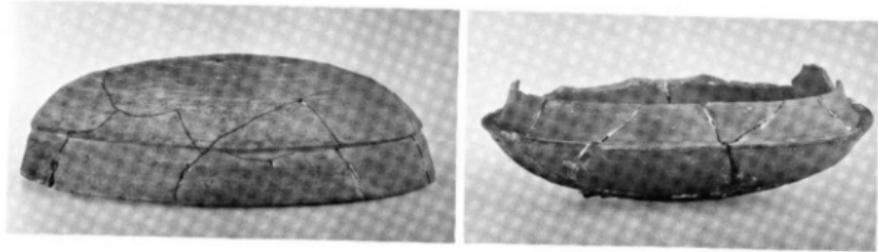
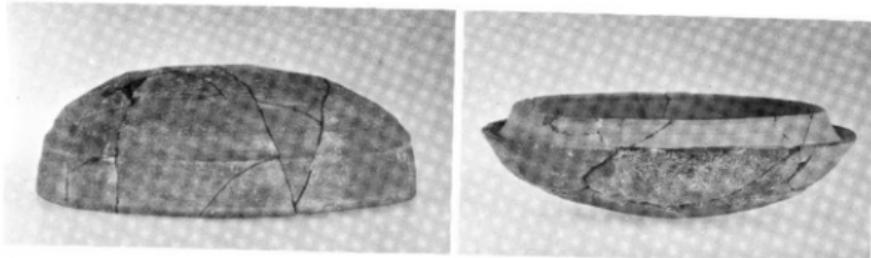
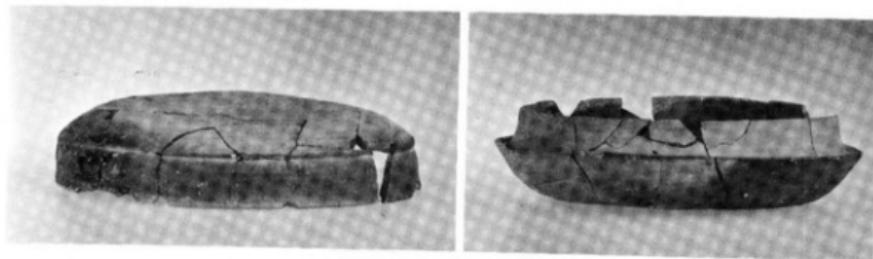
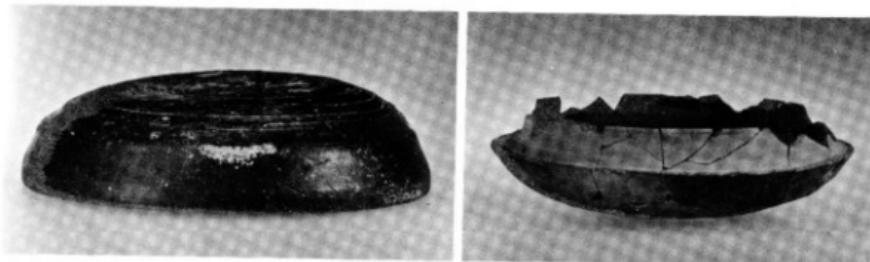
[高さ 22.3 cm]



[高さ 16.7 cm]



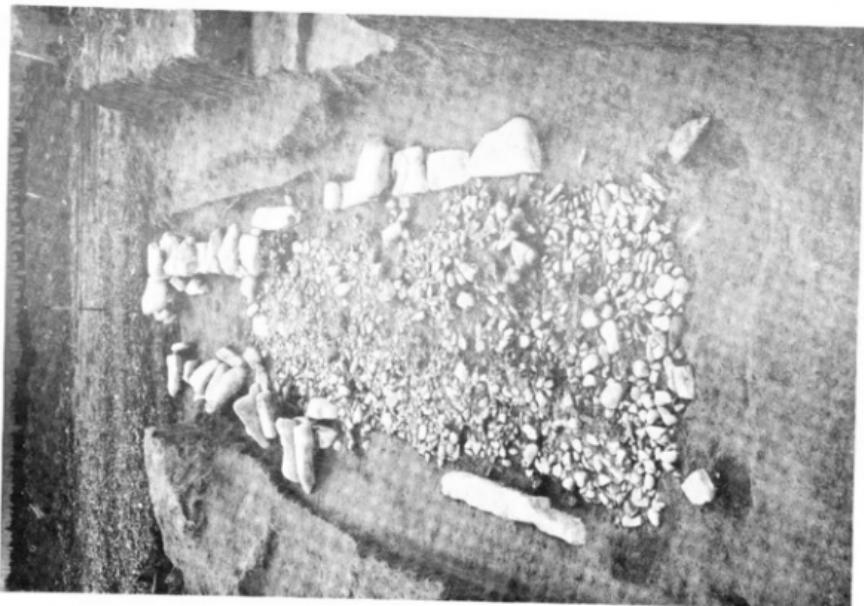
図版 6



図版 7



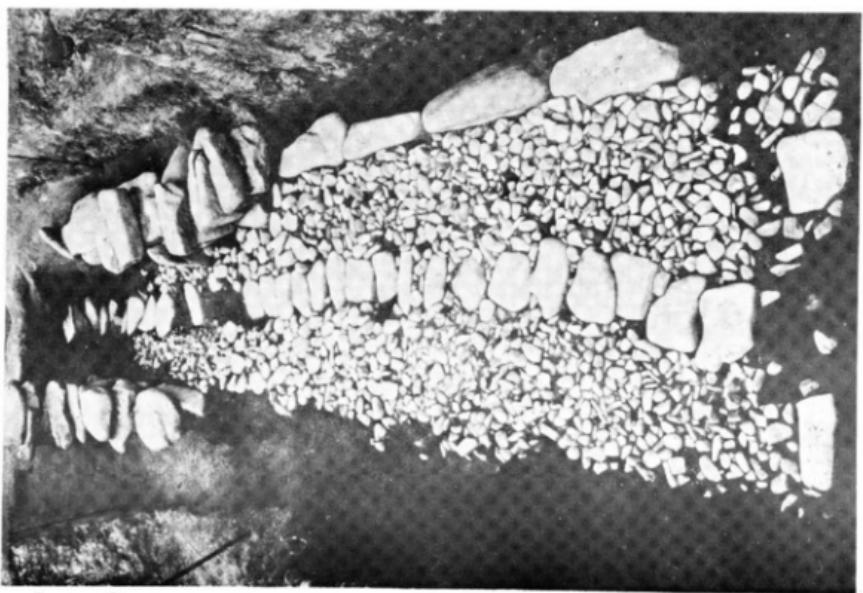
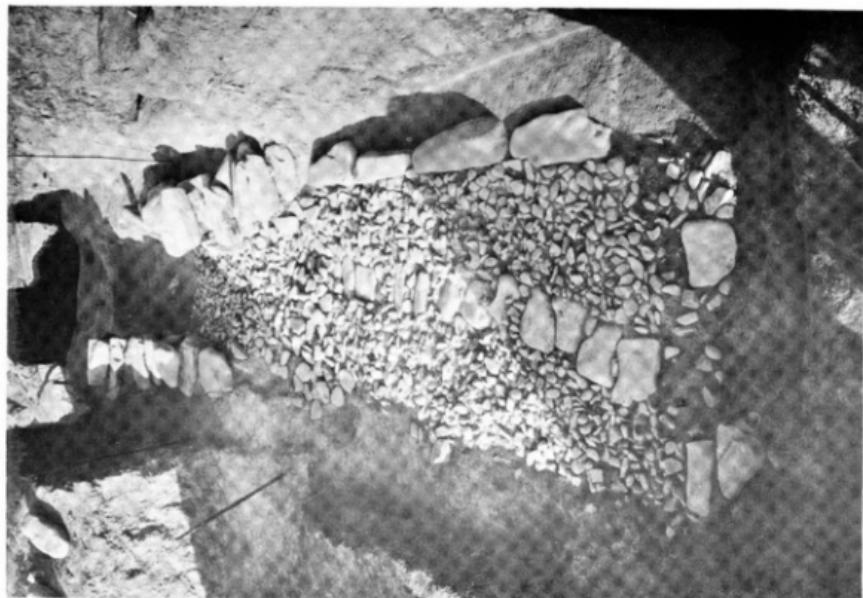
図版 8



図版 9



図版 10



図版 11



報告第3号

【非売品】

発行日 昭和48年8月1日

発行所 香川県観音寺市教育委員会

編集 観音寺市文化財保護協会

印刷 有明高速印刷
(観音寺市中新町)